

長崎大学 学生のみなさん

こんにちは！長崎大学人，河野茂です。

各学部長に寄稿をお願いしている「月曜通信」ですが、今回は薬学部長、西田孝洋先生から皆さんへのメッセージを送ります。

西田孝洋先生 紹介ページ

<https://www.ph.nagasaki-u.ac.jp/lab/dds/>

<https://researchmap.jp/read0172925/>

---

セレンディピティへの準備

長崎大学薬学部長 西田孝洋

薬学部長の西田孝洋(にしだ こうよう)です。

私が紹介するテーマは、科学分野のキーワード「セレンディピティ(serendipity)」です。

今回は、あまり堅く考えず、拡大解釈した身近なセレンディピティを取り上げます。

「セレンディピティ」とは、予想外のものを偶然に発見したり、探し物とは別の価値を偶然に見つけたりすることです。

『セレンディップの3人の王子』という童話にちなんだ造語と考えられています。

フランスの細菌学者ルイ・パスツールは“Chance favors prepared mind”の名言を残しており、セレンディピティはノーベル賞受賞者のエピソードの中でよく語られています。

医薬品の中で史上最大の発見と言われているのは、アレクサンダー・フレミング博士により発見された抗生物質ペニシリンです。

フレミング博士は、ブドウ球菌を培養していたシャーレ中で、アオカビが生えていた周りが死滅していた失敗の原因を見逃しませんでした。

このように、ペニシリンは鋭い観察眼と推察から産まれました。

私にとっての最大のセレンディピティは、学生時代に最適な勉強のやり方(今では常識かもしれませんが)を偶然見いだしたことです。

高校時代には、適度な運動が勉強やストレス解消に役立つことを見つけ、現在も実践しています(ジョギングとテニス)。

大学時代には、記憶には寝る前が一番良いタイミングであること、睡眠が思考の整理に有効であることを見いだしました。

大学院入試(当時の試験科目数は多かった)や薬剤師国家試験を乗り越え、今でも各種講演の準備や論文作成で活用しています。

このような効果は、脳科学的研究でも証明されています。

その他にも、先生や先輩方のアドバイスにより、困難な問題を解決できたこともセレンディピティと言えるかもしれません。

最近のセレンディピティは、講義手法に関する面白いアイデア・仕組みです(紙面の都合上、詳細は省略)。

コロナ禍前の札幌出張中に、緑や水など自然に溢れた北海道大学キャンパス内を散歩している時に頭に浮かびました。

たまには、このような非日常に身を置くこともすごく大事ですね。

この時に思いついたアイデアは、これまでの知識伝達スタイルと比べて、実践的かつサステナブルな知識を身につけるために効果的だと思います。

この教育手法を実現するには、オンデマンドコンテンツが必須となります。

何と札幌出張からまもなくコロナ禍となり、オンライン教育があつという間に浸透しました。

現在では、講義内容のオンデマンドコンテンツを揃え、Zoomなどで地理的制約もほとんど無くなり、私が理想としていたグループワークを基本とする柔軟なアクティブラーニングを実現することが徐々に出来ています。

どのような学問領域でも、知識を単純に覚えるだけではなく、共通する特徴や相違点などを考えて概念化した上で、課題解決に活かせる総合力が必須となります。

皆さんがここまで得てきた知識を生き生きとした実践的なものにするためにも、周りとしっかりつながり、多様な影響・刺激を受けて下さい。

コロナとは共存しつつも、行動制限などは無くなり、セレンディピティが降臨する機会も増えると期待されます。

ただ、そのためにはしっかりと準備することが必要ですね。